2021 年 3 月 25 日開催・第 9 回宮本賞・若者シンポジウム

本若者シンポジウムは限定配信の Youtube でご覧いただけます(会員限定)

https://youtu.be/bqosCeLFQ1k

◆宮本会長のご挨拶

コロナが蔓延している日本ですが、このように集まることが出来て大変うれしく思います。宮本賞も回を重ね、より多くの方々に参加いただき、内容も充実してきています。私たちがこの企画を開始したのは、これからは若い人たちを中心に考えていかなければならない、そのために、宮本賞のような場を設けようと思ったからです。

日本と中国は本当に長い付き合いです。山口県で出土した弥生時代人の骨と、山東省で出土した人の骨の DNA が一致したそうです。つまり、紀元前から、中国大陸に住んでいた人たちが日本に渡ってきているということです。中国も、広い国土に多数の異なる民族が生まれ、発展し、そして今日の中華民族と呼ばれる大きな塊を作り上げていきました。日本は海を隔てていますが、主に仏教を中心とする中国の文化の影響を受けながら、今日の日本文化を作り上げていきました。

明治時代以降、日本はいち早く西洋化し、西洋の様々な語彙、即ちボキャブラリーを、漢字を使って表し、それが中国に入っていく。そのことにより、新しい漢字、文化の形成に役立つことが出来ました。要するに、日本と中国は切っても切れない関係にあるわけです。

ところが、日本の中国侵略という歴史ゆえに、日本と中国は何かと言うと感情的に対立して、冷静に話し合うことができない。それは実際に戦った方、それを受け継いだ我々の世代も、ずっと影響を受けてきたわけです。

しかし、今、革命的と言ってもよいような変化が東アジアをはじめ、全世界で起きています。それは SNS、スマートフォンなど、現代のコミュニケーション手段を手に入れたことです。

現在の 20 代～30 代の人々は、生まれた時からこういった手段を手に入れていた人々です。彼らは我々の発想をはるかに超えて、お互いに交流できる、所謂、同じような発想方法、同じような言葉を持っています。ということは、このように若い人たちは、日本と中国、日本と韓国、韓国と中国などと、私たちが考えられないような、さまざまな新しい関係を作り出していけるということです。

そういった中で、今回、日本と中国の若者たちが、直接話し合うことによって、なぜ我々は、学生の皆さんたちの両親だったり、お祖父さん、お祖母さんの場合だったりするわけですが、どうしてコミュニケーションを上手に取れなかったのだろう？どうして何かというと感情的になり対立してしまうのだろう？社会の世論は、どうしてこのように感情的になるのだろう？これらの問いを、若い世代の方たちはもっと冷静に相互交流を通じて理解することができるのではないか？即ち日本と中国の間の大変な感情問題、これを若い世代は新しいコミュニケーションの手段、言語を使い、お互いに一歩も二歩も近づくことが出来るのではないか、と思っています。

今回、宮本賞を受賞された方たちの新しい感覚、新しい視点、そういうものを私たちは◎◎させていただきました。是非今日は、そういうものを基礎として、更に一歩も二歩も踏み込んでお互いに話をしあい、大いに議論をして、そして相互理解を深めていただきたいと思います。

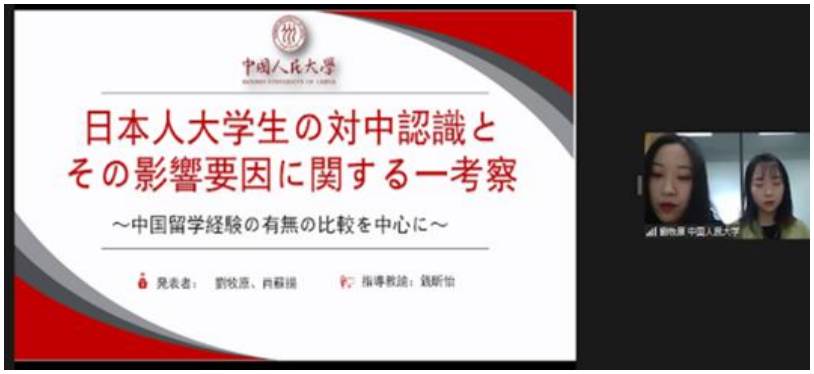
アメリカと中国の関係がおかしくなって、世の中どうなるのかという心配の声が聞こえてきますます。しかし、私は日本と中国、国民同士の対話は、何が何でも続けていかなければならないし、強化していかなければならないと思っています。そしてお互いのことをよく知った人が増えれば増えるほど、何が起ころうとも両国の関係は安定し、良い方向に進んでいくと確信しています。

今日の皆さん方の討論、議論が必ず成功裏に終わると確信して、そして皆さんに心からの声援をお送りして、私の冒頭のご挨拶に代えさせていただきます。

◆プレゼンテーション

1)人民大学　（学部生の部・優秀賞）　劉牧原さん、肖蘇揚さん

「日本人大学生の対中認識とその影響要因に関する一考察」



中国留学経験の有無の比較を中心に、アンケートを通じて日本人大学生の対中認識の実態と影響を分析。留学経験者は非経験者に比べ、対中イメージが良くなることを確認。また、その要

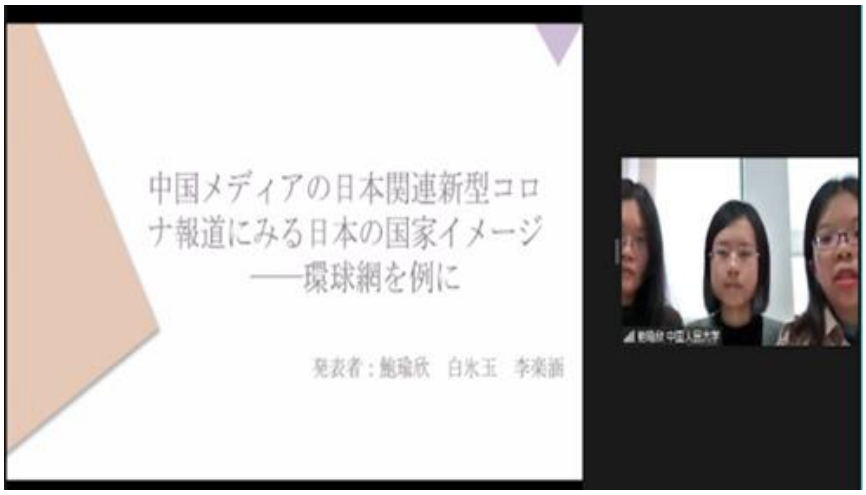
因は主に情報源の違いによることも検証された。これを踏まえ、お互いの国家に対する認識を深め、イメージを改善する上で、留学等をはじめとする直接体験の重要性が説かれる。

2)人民大学（学部生の部・優秀賞）

鮑瑜欣さん、白氷玉さん、李楽涵さん

「中国メディアの日本関連新型コロナ報道にみる日本の国家イメージ」

今年 1 月以降の新型コロナウィルス感染拡大に伴い、中国メディアの日本関連の新型コロナウィルス報道は、日本の国家イメージと中国人の対日認識にどのような影響を与えたのか。70 日間に亘る「環球網」の関連報道からサンプルを抽出し、フレーム理論と内容分析を用い、「コロナ対策」、「コロナの影響」、「中日協力」の三つの切り口から、中国における日本の国家イメージを分析する。



3)浙江工業大学（学部生の部・優秀賞）　杜沁怡さん

「日中比較による中国アニメ産業の一考察」

「アニメ王国」である日本は、アニメ・マンガを通じ商業利益を得るのみならず、文化

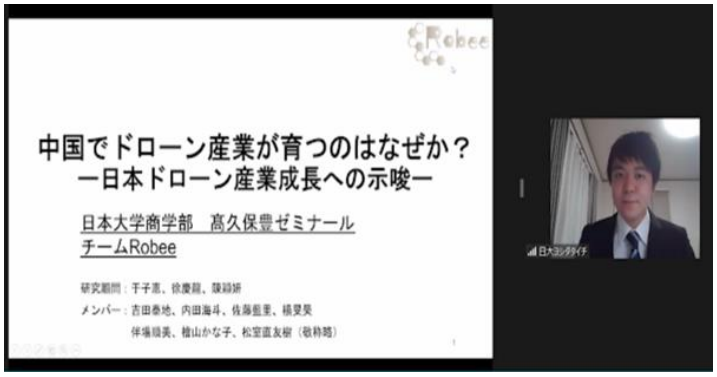
の輸出にも成功した。一方、2004 年以降、中国政府は国産アニメの育成に注力し、現在アニメ生産量は世界一位となった。また、最近はいくつかの中国アニメが日本に上陸するなど、質的にも向上しつつある。国内市場が縮小する中、日本のアニメ産業にとって中国市場は魅力的であり、将来的に日中共同制作等の協業が増えることにより、両国関係改善の切り札になり得るかを探る。

※上記の皆さんは授業出席のため、プレゼンテーションのみ行い、退室されました。

◆プレゼンテーションと討議セッション

◎A 班（産業）プレゼンテーション

1)日本大学商学部　（学部生の部・最優秀賞）吉田泰地さん、楊旻昊さん、内田海斗さん、佐藤藍里さん、伴場順美さん、檜山かな子さん、松室直友樹さん
中国でドローン産業が育つのはなぜか？～日本ドローン産業育成への示唆



近年、中国では大胆な法整備や産業支援により、ドローンの社会実装が急速に進んでいる一方、日本では社会実装が進んでいない。文献とアンケート調査により、日本では慎重な法整備が民間の意欲を抑制し、その結果として社会実装が遅れていることが判明。日本の特徴である安全性と、中国のスピード感・チャレンジ精神を共に取り入れることで、より良いドローンの生産と、日本のドローン産業の発展の可能性を提起する。

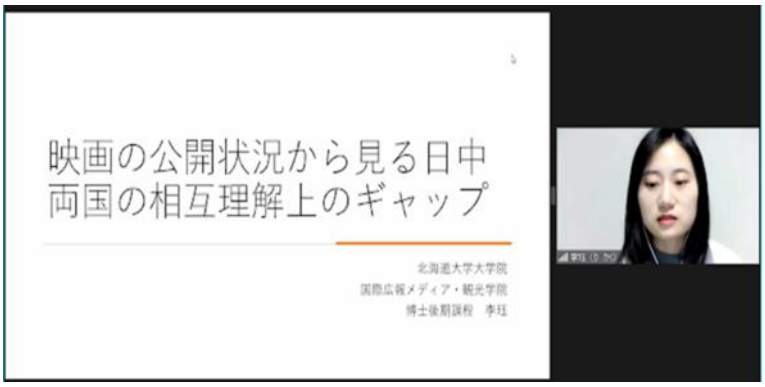
2)北京外語大（院生の部・特別賞）　張語鑠さん
日本の歴史的観光地に対する中国人観光客の評価に関する考察～浅草寺を例に～

日本の歴史と伝統文化を伝える観光地に中国人観光客はどのような関心を持つのか。浅草寺を例に考察する。シートリップから収集した評価に対して感情分析を行った。結論として、中国人観光客の訪れる主要な場所が雷門と仲見世で、宝蔵門や本堂や二天門などに言及した評価がほとんどないこと、観光客が主に和服体験や籤引きや買い物をするという

こと、そして、85％以上の中国人がポジティブな感情を持っていることが挙げられる。浅草寺をより詳しく紹介することやサービス多様化に旅行会社が取り組むことなどを提案する。

3)北海道大学（院生の部・特別賞）　　李珏さん

映画の公開状況から見る日中両国の相互理解上のギャップ



両国の国民が交流を通じ、相手国に対するイメージを常に変化させている。日本人は中国の反日デモの報道を見ながら、中国の観光客や留学生と接触して相手を少しずつ理解している。中国人は歴史教科書で日本に関する問題を勉強しながら、日本のポップカルチャーが大好きだ。相手国のイメージは複雑で常にギャップが生じる。イメージ形成に重要な役割を果たすメディアの一つである映画を取り上げ、相互理解上のギャップを究明する。

◎A 班（産業）討議セッション

モデレーター：林千野（双日株式会社海外業務部中国デスクリーダー
日中関係学会副会長、第 9 回宮本賞実行委員長）

林千野（モデレーター）：では早速、個別の論文について、参加者への事前の質問なども踏まえ討議を進めたい。先ずは日大の論文だが、「中国ドローン産業が発展しているのは、『先ずはチャレンジ、あとで修正』という姿勢を通じ、いち早く産業基盤を確立させているが、日本では、『まずは慎重に、その後も慎重に』で進めており、産業基盤が未だに確立できていない。」とある。李珏さんからこの点につき問題提起があったので、お願いしたい。

李珏：北海道大学：日中のこのような姿勢はおそらくドローン産業だけではなく、いろいろな場面で同じだと思うが、中国政府と日本政府の異なる姿勢を形成させた原因は？

吉田泰地；日本大学：論文の中でも触れたように、ドローンであれば、「製造 2025」という大胆な決まりを先に作り、あとでまずい点が出てきたら補完するというやり方を取っている。このような方法で、民がついていき、成功すると国も豊かになるという好循環ができている。日本は保守的であり、安全性が優先されてしまうことが違いを生む原因だと考える。

林：先ほどの日大のプレゼンでは、日本のドローン産業発展の近道は「日本の安全面への慎重さ」と「中国のスピード感とチャレンジ精神」のお互いの弱みをお互いの強みで補う「共創関係」を築き上げることが必要とのことだったが、具体的にはどういうことか？

吉田：中国で社会実装されたドローンを日本に導入し、日本において更に安全性を向上させ

ていき、それを更に中国に持ち帰ってもらうということをイメージした。これらを通じ、産業分野におけるよりよい日中間の共創関係が構築できると考える。

林：では、次に張語鑠さんの論文について、日大チームから質問を提起いただきたい。

伴場順美：日本大学；中国最大の検索エンジンでも日本の代表的な観光地である浅草の情報があまり詳しく掲載されていないとのことであり、解決策の一つとしてあげられていた無名な場所を開発することはより困難だと感じる、何から着手すれば良いか。

張語鑠：北京外国語大：中国人がどこに行こうかと考えるとき、旅行会社のアプリで探す。先ずはそこに行ってから、例えば「浅草神社に行こう」と決め、前日あたりにその歴史などを調べる。よって、中国人旅行者を誘致するには旅行会社と連携して、中国のネットで宣伝するなど、中国の人々に情報をもっと知らせることが必要だと思う。

林：コロナの前は日本を訪問する中国人観光客が多数おり、それが昨今の対日感情の改善に役立っているとの分析がある。実際に日本に来て、清潔、安全、食べ物はおいしい、日本人は親切で、思っていた印象と違うなど、直接交流は重要だと思う。一方で、中国を訪問する日本人観光客はなかなか増えない。どうすればこの状況を改善できるか？

張：若者が使う LINE などで、旅行に関する面白い情報を載せるなど、若者の中国に対するイメージを良くすることや、サービスの多様化、日本人に人気のある場所に日本語サービス案内の施設を設けるなどが考えられる。

林：日大はコロナ前には中国を訪問し、工場や企業を視察して論文を書いていたと思うが、コロナ終息後、行ってみたい中国の観光地はある？

檜山かな子：日本大学：観光地は思いつかないが、中国コスメなど美容に興味がある。

林：去年最優秀賞受賞作品にも、中国系メイクが日本で流行していると書かれていた。次に、李珏さんの論文について、日大チームからいくつか質問が来ているのでお願いしたい。

伴場：コロナ禍によりお家時間が増え、自宅で映画鑑賞ができるコンテンツ(Netflix や Amazon prime video など)がより身近になったと感じる。この動きが、今後日中のお互いに対するイメージのギャップを埋めるスピードを加速化させることに寄与すると考えるか？

李珏/北海道大学：これらのコンテンツは中国のもののみを提供しているわけではないため、ギャップを埋めることにつながるわけではないと思う。今の日本人の若者は、中国を好きか嫌いかではなく、関心がない。よって観光地でいくら日本語サービスを供与したとしても、関心がないならそもそも行かない。よって先ずは、関心を呼び起こすことが必要。

伴場：では次に、論文本体の中の記載である「映画は新聞報道や、テレビ番組、そしてネットに流れる情報に比べて、より完成度が高い」とありますが、どの観点における完成度か？

李珏：映画は独立した起承転結を含むストーリーを提供しており、新聞報道やネット情報に比べて、イデオロギーのみの視点で考えることにつながらない点だと思う。

林：では、私の李さんの論文に対する感想を述べたい。冒頭、宮本会長も述べられたが、日中の政治的な対立はなかなか解決の糸口が見つからない。私自身、2014 年から宮本賞の審査委員をさせていただいているが、その中で日本のポップカルチャーや、中国のメイクなど、

所謂「文化」が与える影響力は、政治的対立を乗り越えるパワーがあると感じる。李さんの論文中、遠藤誉さんの著作「中国動漫新人類」からの引用「中国で接触する若者たちは日本の同世代以上に『日本動漫(=アニメ)』が大好きなのだ」、「一方、歴史問題をめぐる『愛国主義教育』と日本の動漫うぃ通して形成する日本に対する親近感という二つの感情は(中略)、一人の中国人の心の中で、互いに干渉することなく無関係に存在している」、と述べられている。ということは、せっかく文化を通じて相手の国を好きになったとしても、「負」の感情はずっと並行して存在していくということなのか？

李：私自身は遠藤さんの観点に賛成する。私自身も、小さいころから愛国主義教育を受けて大きくなった。教育は、日本のアニメが好きな気持ちや、日本に対する興味、日本に留学しようとする決定を妨げるものではないし、日本に対する親近感にも影響しない。と同時に、今まで受けてきた愛国主義教育を否定するものでもなく、併存している。但し、世の中に「絶対」ということはないので、この二つの感情が絶対にぶつからないということではない。だから非常事態に陥らないように、今、できることをやっている。

林：このテーマは非常に大切だと思う。あと、後ほど（院生の部の最優秀賞を受賞された）南部健人さんのプレゼンテーションがあると思うが、個人の直接体験が相手国への感情を変えてしまうことがあるという点も、大切な要素だと言えるだろう。文化などを通じて相手の国に興味をもち、例えば好きという感情とそうでない感情を並行して持ち、頭の中では割り切りながら、直接交流を通して国を構成する一人一人の顔を思い浮かべながら、相手の国が置かれた立場を慮れる、そういった交流が一つの理想なのではないかと思う。今の李さんのお話しはこの点を考える上でもとても参考になった。

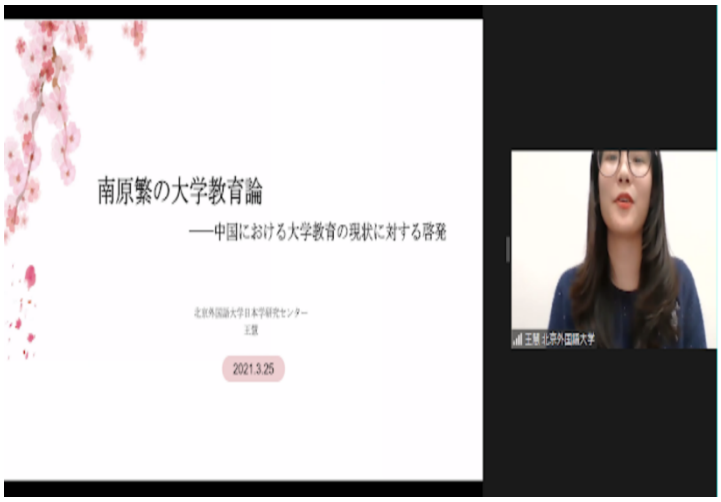
（A 班モデレーター　林千野）

B 班（文化・教育）プレゼンテーション

1）二松学舎大（院生の部：優秀賞）王風さん

夏目漱石の漢詩について　―言語と思想の特徴、および漢文学からの影響―

中国でも広く知られる夏目漱石の作品の中でも、その漢詩作品群に着目、特色を論じた。平仄音韻の正確さを保ちつつ和製漢語や「和習」と呼ばれる日本的表現を採り入れていること、一方で漢文学からの引用も目立つことを指摘。また漱石晩年の境地である「則天去私」の意味するところが漢詩創作を通じて明らかにすることができるという。



２）北京外語大（院生の部・特別賞）王慧さん
南原繁の大学教育論―中国大学の教育現状に対する啓発
新制東京大学の初代総長として知られる政治哲学者、南原繁の教育論を解読した。日本の戦後教育に多大な影響をもたらした南原は、大学教育を通じて「真理を愛し、正義を重んじる人間の形成」を目指したとし、この考え方が現在の中国の大学教育のあり方を改めていくうえで手がかりになるのではないかと問題提起している。

３）華東理工大（学部生の部・特別賞）林悦さん：日本のサブカルチャーにおける役割語の使用と翻訳

日本語にある「役割語」に着目した論文である。日本発の人気ゲームソフト「ダンガンロンパ」に出てくる様々なセリフから役割語を拾い上げた。それは例えば「うふふ、嫌ですわ」「俺様を呼び出しやがったのは・・・」といった言葉遣いにみられる。これらを中国語訳と比較研究し、役割語の豊富さに日本語の特色があることを見いだしている。
※尚、王風さんは浙江省杭州、王慧さんは北京、林悦さんは上海からのリモート参加となった。

Ｂ班（文化・教育）討議セッション
モデレーター：村上太輝夫（朝日新聞オピニオン編集部解説面編集長、日中関係学会理事）

研究テーマを選んだきっかけについて３人に尋ねたところ、いずれも大学の授業、指導教官の影響があったといい、中国の大学における日本文化研究の多様さがうかがわれた。

漱石の漢詩については「漱石の小説について言われる、自己本位から則天去私への転換が漢詩からも読み取れるか」（王慧さん）という問いかけがあり、王風さんは「初期の漢詩に

は金銭のこと、学問が進まないことなどが出てくる。そこから則天去私に至るまでを漢詩に見ることができ、漢詩と小説は関連していると言える」と答えた。

南原を研究した王慧さんは発表を補充する形で、①日本の戦後知識人の思想には中国にとって啓発するところが多い②南原による正義の強調は儒学思想の影響が感じられる、と説明した。

林悦さんは役割語のおもしろさを説明する一方、それがあくまで虚構の世界の言葉であり、実際の日本人がそのように話すわけではないと指摘。王慧さんとの議論を通じて、中国人の日本語の話し方を指すものとして時折みられる「〇〇あるよ」のようなステレオタイプと通じる問題を孕んでいることも浮かび上がった。

以上の 3 人の発表は、日本文化の中で日本人が忘れている、あるいは見過ごしてきたものに中国の若者が注目し、研究した成果である。日中交流の意義の一端を明確に示しているものとして高く評価したい。　（B 班モデレーター　村上太輝夫）

C 班（日中関係の歴史・国民感情/政府レベル）プレゼンテーション

1）北京大学（最優秀賞）南部健康人さん：
老舎の対日感情の変化―「日中友好」を再考する

幼少期から日中戦争を経て戦後まで老舎の対日感情を追っていくと、日本に憎悪を抱いていた老舎の認識が本質的に変化したのが実は日中戦争期であることが分かる。その要因として 3 人の日本人との出会いがあることを指摘し、そこから生じた老舎対日感情の変化と深化を、老舎の言動を通して分析する。これをヒントに、「日中友好」という使い古された言葉の可能性を考え直す。

2）北京外国語大学（学部生の部：特別賞）　任依婷さん：
戦時期日本の婦人雑誌にみる植民地主義

戦時中に発行された「主婦之友」の中国関連記事を対象にテキスト分析を行い、日本において婦人雑誌が果たした重要な役割を検証する。研究対象となった 3 つの記事からは、女性の特質を利用して植民地主義的発想を巧みに植え付けようとするマス・メディアの意図が浮かび上がる。

3）北京大学燕京学堂（院生の部：優秀賞）岡本紀笙さん：「人道的観点に立脚した日中関係の構築へ向けて――日中政府間の歴史認識問題を事例として――」

歴史認識は依然として日中間の課題の一つである。2000 年代以降両国にナショナリズムが広がり、人命尊重という人道的観点が周辺化された。南京事件での犠牲者数の多寡が政治的な意味を帯び、人命が失われたという本質的な事実は埋没した。人道的観点は中立公平を基本とする規範であり、両国の共通認識の構築に寄与する。両国は政治家と歴史家の役割を明確にし、必要な議論を続け、人道的観点に立脚した関係を構築するべきである。

C 班（日中関係の歴史・国民感情/政府レベル）討議セッション
モデレーター：高山勇一（元現代文化研究所常務取締役、日中関係学会理事、第 9 回宮本賞審査委員）

高山勇一（モデレーター）：C 班は 3 つのテーマで討論したい。最初は「民間交流・個人の友人関係」についてです。南部さんは論文で、老舎の日本への強い憎しみが、中国や米国で反戦活動を行う 3 人の日本人との出会いにより、変わったことを分析。個人間で真の友好、信頼関係を築くことの重要性を示されましたが、より多くの人がそれを築き、信頼の輪を広げるためには、何が必要でしょうか。皆さんのご経験も踏まえてご意見をお願いします。

任依婷（北京外国語大学卒業）：日本に 1 年間交換留学していた時、国際宿舎に住んでおり、日本人のみならず多くの国の人とお付き合いすることができた。そこで気づいたのは、それぞれの人は、どこかの国の人である前にひとりの人であり、個性や自分の考えを持っていることでした。交流においては、国による先入観をもたず、国民と国家を一体化しないことが大切と考えている。

岡本紀笙（北京大学大学院修士 1 年）：個人間で信頼関係を築くことの重要性に同感します。国際関係の文脈では国家が主たるアクターという考え方があるが、もはや国家レベルのみで物事を判断することには無理があると思っている。国民の考え方も重層的だ。国家を単位としてその国の印象を判断することには限界がある。信頼関係を築く上では、人の往来が重要かつ必要。私も学部時代に、北京に 1 年間留学し多くの友人に恵まれた。今でも彼らとは連絡を取り合う仲。コロナ禍では難しいが、対面で会って話すことが一番重要だ。

南部健人（北京大学大学院修士修了）：民間交流は本当に大事。それを進めるための改善点は、日本側では中国に行く人がもっと増えること。加えて、中国に係わっている人も、中国語をしっかり学び、中国語で中国人と関わっていかなければ深い交流が難しいと思う。中国は、社会構造的に国とか公の権限が強いため、民間交流でも主催者が国や政府であったりする。それは今の段階では大事なことだが、市民社会の形成がもっと成熟しなければ、民間交流を行うという根本的な問題は解決しないだろう。

もう一つ、個人の友好面では、北京大学留学時に、中国の友人の実家で春節を過ごしたが、戻ってから友人に「母と一緒にいて嫌な思いをしなかったか」と尋ねられた。そんなことは全くなく、大変良くしてもらったのだが、「実は母は、本当に日本が大嫌いなのだ」と告げられびっくりした。と同時に、そうした素振りすら見せなかったお母さんの奥深さを思った。このような「嫌日だが素晴らしい人」とも交流し、友好を結んでいかなければ駄目だ。

高山：2 番目のテーマは「メディアの果たす役割」です。任さんは、戦時中の「主婦の友」の記事を基に、女性への植民地主義の宣伝を分析したが、論文の最後で、マス・メディアに対して“ 狭隘な「ナショナリズム」を排して、 大局的な見地から公平性を確保した報道”を求めています。戦時下のように厳しい政府の規制がある場合などは、難しいものがあると思うが、戦時・平時でのメディアの役割をどのように考えるか。また求めるか。

岡本：メディアには、ひとつの事象に対して様々な角度から視点を提供する役割もあると思う。また、メディアには中立・公正な報道を求める声も多くあるが、若干の違和感がある。それだけではただ事実を報道するだけにもなりかねない。各社には、独自のスタンス・社是があるので、そこからの視点、意見を提供することが付加価値だと思う。読者が各社の報道

を読み比べて、自らが中立的な立ち位置に進むことが大切ではないか。各社の意見の違いが分かり、批判、検討することができるようになればメディアに踊らされることもないだろう。

任：岡本さんがおっしゃる通りだろう。新聞に中立性を求めるのは不可能で、記事に自分の主観が入らないことはありえないと思う。重要なことは、情報源の多様性だ。戦時下のような特別な時期でも、メディアが最低限に出来ることは、違う視点の情報を提供する事。また、もう一つは情報源の確かさだ。信頼できる情報機関から提供されることで情報の確かさも保たれるのではないか。日本のツイッターで、中国への悪い情報が度々みられる。それの情報源を書いていないにも関わらず、多くの人がそれにコメントしている。同じようなことは中国でもみられ、ネット上で日本についての間違った投稿やステレオタイプな書き込みがあり、人々がそれに影響を受けている。

南部：メディアには、言葉の豊かさを失わない報道、言葉を大切にする所がもっとあっても良いと思う。任さんがおっしゃったように、今は SNS の時代で、見出の一文とか強烈な印象を残せるかとかいうことで、極端なものがウケる傾向がある。人間の感情にはグレーゾーンが本当はあって、一口の反日と言ってもいろいろなものがある。報道機関には、文字とか言葉の多様性、多義性をもう少し取り戻してもらえればと思う。

高山：最後のテーマは「日中政府間の関係改善にために」です。岡本さんは論文で、関係を良好にするためには、日中政府が「人道的観点」を持つことが重要と提案されている。これをどのように受け止められましたか。他の視点はあるでしょうか。

任：岡本さんが言われる「人道的観点」は重要だ。しかし、理想的な面もある。政府や政治家がそれを受け入れるのは難しいと考える。いま大事なのは国際主義の方だ。国際主義は、諸国家・諸民族の共存共栄、社会の発展を願うもの。相互発展のために諸国家が連携することは実践的であり、受け入れやすいのではないか。

南部：「人道的観点」は絶対的に大事な視点だ。問題は皆がそう思っているのに、現実はそうではないことだ。個人のレベルでいうと、人道的とは自分のことは一旦さておき、他人のために何かをすることだと思う。それは難しいことだが、短期的に自分にとって良いことが、長期的に自分のためになっているかというと、多分そうではない。国家の次元でも、国際関係では政治的に振舞ったほうが利益は大きい。それを何とかして、人道的に行う方が利益は大きいという方向に転換していけるかどうかだ。

岡本：任さんから、理想的すぎるとの指摘をいただいたがその通りです。政治家が「人道的観点」をすぐに導入できるかと言えばそうではない。南部さんもおっしゃったように、国の立場、国益を守るのが政治家や官僚の仕事でもある。国益にそぐわないものは実施しづらい。では、そういったなかで何が必要かと言えば、今回の討論の原点に戻るが、民衆の力だ。公的レベル、政府、官僚などにある種の圧力を徐々に与えていく。時間はかかるが、そのような促すような動きをしていくことが大切なのではないか。

（C 班モデレーター：高山勇一）